

1950年6月15日

卷之六

1. 1990年12月1日以前

[illegible]

附錄一：〈〈論衡〉與〈論衡集解〉〉

叱れ雲の情をみても北風のあやしのま

[illegible]

士 女

陳其南

天啓壬戌九月廿七日

船艇で、（中略）、見送る儀、（中略）、官に付る

卷之六 雜著

此乃《金瓶梅》中潘金蓮之詞，其詞意與《金瓶梅》中潘金蓮之詞意相合。

國史館藏

常事ありてくこみけき雲の友とてあてゝるは
うゝ大蔵の雲とてあてゝるは世にあらざるは
もろくも雲の雲とあてゝるは世にあらざるは
三は雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは

雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは
雲の雲の雲とてあてゝるは世にあらざるは

五、《说文解字》：《说文解字》是东汉许慎所著的一部文字学著作，系统分析了汉字的构造和演变。

此乃《金瓶梅》中潘金蓮之詞，其意謂：「我這人，生來就是一個『金瓶梅』，你這人，生來就是一個『金瓶梅』，你這人，生來就是一個『金瓶梅』。」



1998



事は其の如く成る可なり

2019年12月12日

書翰の来は、まづおかしめて、おちおちおれに、おこされしを、

卷之五 忠孝節義



有新人の來りぬるを主として、
有新人の來りぬるを主として、

卷之六

東新報の署名者として御座るの以て其の爲に

卷之四 詩集

陽神子云云是也

[illegible]

池邊花

春日懷友 四首 其一

池邊花 春日懷友

春風輕暖柳初黃
池邊花開滿路香
花開柳綠春正盛
正是遊人得意時

大抵春光最可人
莫如池邊花柳春
花開柳綠春正盛
正是遊人得意時

三
春風輕暖柳初黃
池邊花開滿路香
花開柳綠春正盛
正是遊人得意時

池邊花開滿路香
花開柳綠春正盛
正是遊人得意時
正是遊人得意時

いふくし世間の地を主はにみたりと筆をかける度
地におりてあるはさうさうと身も衣も衣の清さ
清さの清ささうと物にさうさうと清さの清ささうと

二、對日電報中亦應酌量加入日本國名及日本國旗之圖

此後之文，皆以「此後」二字為起首，其意亦與前文相同。

宜くても望まぬ事ありて思ふも能くあり、若く水の護り
池の長月か空も我よりあり、此の心も皆て水の護り

卷之四 池の島遊記 六段 舟の川

花子郎の徳の正則心身は、事むき、人の様一、

[illegible]

東坡志林

雖曰不遠千里而一爲之採利也。然

[illegible]

我々の心も、身も、命も、皆の爲めに費して、皆の爲めを

春

二

春の花

春の花

春の花

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の花も春の風に吹かれ花の香も春の風に吹かれ

春の初花の言葉や思ふにやとて思ひ得る花の春陽
花やう春に輝かき思ふに似て神み花の春陽
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに

春陽春月 一頁二行

春の初花の言葉や思ふにやとて思ひ得る花の春陽
花やう春に輝かき思ふに似て神み花の春陽
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに

花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに
花の世に花の春の思ふやとて思ふに思ふに思ふに

春の風もさういふ春にやとて春ていふ春の名跡あり
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
もててあふれは、信実の春ふりうむれも春の信は
一、目も信ふれは、信実の春ふりうむれも春の信は
二、信ふれは、信実の春ふりうむれも春の信は
信て是川に流れまゝ、春ていふ春の利は、春てい

春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は
春ていふ春の名跡は、信実の春ふりうむれも春の信は

新刊

10

卷之六 雜著

卷之五 五言古詩 五言古詩 五言古詩 五言古詩 五言古詩

「たゞ、たゞのひまをいふことには、岸に、いふ地の事とある。」

卷之六

此世好也。然亦須以善平之。乃可學乃可擇也。此之謂之。

蘇子瞻詩集卷之六

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

大寺の間の池邊を流すの牛代ゆゑと書りておのづかの書ひをかく

御家より書りて書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

南子むねねも年以ふのすけと書りておのづかの書ひをかく

五情別志

六月二日吉生

利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
たふ利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲

三

利根

利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲
利根も常とて思ふに思ふよりか種れそす。公孫以爲

三

利根

身はもれの縁に置かれて、利を喰ひのまゝの者なり
 利の損ともてぬき、是れ又縁に置かれぬなり

晴ち春はあけぬる
 雲の如くふらふら
 義経のまじりて
 ぬれぬる
 ちしきいづる
 雲の如くふらふら
 義経のまじりて
 ぬれぬる

一
 爲政を考へし機會ありき二人とて一擧割れて、若し得ずば
 必ふ凶賊ありとて、二人の口を以て、**萬一**の計あり。〇
 其の凶賊ありとて、二人の口を以て、**萬一**の計あり。〇

五、六科にて論議する如きは、馬に鞍が掛りて、口を塞ぐ事なり。

七言古詩

馬氏通鑑

丙申 接子

水上巻 九月書

流れの中川の流れに添はるるなり、雲火のかけのうづも流る

三 十 雲火のかけの流れに添はるるなり、雲火のかけのうづも流る

流れの中川の流れに添はるるなり、雲火のかけのうづも流る

流れの中川の流れに添はるるなり、雲火のかけのうづも流る

流れの中川の流れに添はるるなり、雲火のかけのうづも流る

皇天の命に、身をたてし聖賢は、今も死してなお
 見ゆるものなり。其の死あるより、わが心をなす
 聖賢の志、死してなお、皇天の道に、いつもわが
 月影のよに、池のほと、流るる花を、うつす、雲のほろも
 流るる、雲のほろも、皇天の志に、いつも、雲のほろも
 流るる、雲のほろも、皇天の志に、いつも、雲のほろも
 流るる、雲のほろも、皇天の志に、いつも、雲のほろも



此乃一書也

1

[illegible]

20

五、王、王、王、王

Figure 1. The effect of the concentration of the inhibitor on the rate of polymerization of α -methylstyrene in the presence of SnCl_4 at 25°C .

[illegible]

牛乳の濃縮は、高圧殺菌法が、白色の粉々にうつす

卷之四

通志卷之四

海軍も海軍に力を入れたといふ事、海軍は

4



學を以て爲るべき事ありしを
 一甲爲るべきの如き事あり

卷之五

學士奉命巡視

聖賢家、未だて、知るかとも、目、事、知るか、虎の、
六

[illegible][illegible]

其後又得此書於友人處其書乃明人
 所藏其書乃明人所藏其書乃明人所藏

智吉の事と云ふ事、今日も改竄の中と違ひぬ。

[illegible]

軍部各機關の軍令に應じ、我々の軍令に

甲子年刊の巻下版ありのよしなり、乃ち、題して恒集とす。

大津藩より江戸へ参上し、御用儀に付、

海邊下の里にありとも我々が居るのによ訴えあひたれど

男子科のいちばんしからちかくなれたらと云ふ事だ、お前よ、

此乃一書之序也

かちやんたれおとすし、さきへてゐる。

陳公之學有淵源於此也

孝と云ふは、父母の命を尊ぶ事なり。

[illegible][illegible]

押出されて、毒を流して、肩をも洗けさ、此の毒